

<http://grimreaper.is-mine.net/>

# ナイトダイバー nightdiver

著：射月アキラ

『い、いました！ 皆様見えませうでしょうか!? あの都市伝説・ナイトダイバーが、今、我々のカメラの前に姿を現しました!』  
不愉快だ。

首の後ろ、うなじの辺りがちりちりする。苛立ちはつのるばかりで、しばらくはその感覚に耐えるしかなさそうだった。

原因は、背後でホバリングしているヘリコプターだ。ボディーにはマイナーなテレビ局のロゴ。その上、メインローターの起こす風が、僕の髪をぐしゃぐしゃにする。辺り一帯に響き渡るのは、ブレードが空気を叩く音。ヘリの後部にあるドアから、銃口みたいに突き出されている漆黑。あれはたぶんカメラだろう。レンズと目が合った、そんな気さえする。

視線を前に戻しつつ、思考も過去へと戻していく。まずは落ち着こう。さて、さっきまで僕は何をしていたんだったか。

日が沈んだから、街に出た。スーツを着たアナウンサーが、何か深刻そうに話していたから、たまにはニュースでも見るかと大型モニターの前で立ち止まった。最近、夜の東京で行方不明者が続出しているらしい。この街も物騒になったものだと、割とどうでもいいことを考え、その後……

そうだ。その後、なぜ駅前前のモニターに映る番組が、ニュースからバラエティーに変更された。都市伝説を追うとかいう、一年前に流行したような安っぽいバラエティーに。

どうして、だろう。内心で首をかしげる。

今カメラが映している場所のモニターで、カメラが映しているものを発信するなんて、非効率的というか、無駄というか。パフォーマンスのつもりだろうか。

『一瞬、我々の方を向いたナイトダイバーでしたが、その後まったく動きません。もう少し、近くに寄れますか——』

巨大モニターから聞こえる声は、リポーター自身が乗っているヘリのおかげで一部しか聞き取れない。パフォーマンスは完璧に失敗してる。

それでもわずかに聞き取れた、大袈裟な興奮を含んだ言葉が終わってすぐ、吹き付けられる風が強くなる。きつと、ヘリが僕に近づいてきたんだろう。

身勝手な、とは思うものの、どうすることもできない。ちりちりと、苛立ちがうなじに凝縮されているような錯覚。肩こりを取るように首をまわした。

仕方ない。逃げよう。ヘリから。不必要な情報を発するモニターから。

幅十センチに満たない足場で腰を上げる。風が吹きすさぶ中、ビルの上、落下防止フェンスの上に立つと、遙か下方でどよめきが起こった。高さは、どのくらいだろう。そこそこ大きなターミナル駅の前にあるビルだから、たぶんフロアは十、もしくはそれに近いはずだ。

地上でざわめく人々を無理矢理に意識の外へ放り出して、フェンスの上を歩く。数歩進んで屋上の角に近づいたところで、一気に歩幅を大きくした。ヘリの発する音の隙間、足元でカシヤカシヤと金属が擦れる音すら聞き取れる。人が息をのむ音も耳に入った気がして、僕は黒い包帯の下でひっそりと苦笑を浮かべる。

まさか、そんな音が聞こえるわけがない。

まさか、僕を案ずる者がいるわけがない。

だって。なぜなら。人々は僕を指して、都市伝説と言うじゃないか。

リポーターの、嘘くさい驚愕の声を背中で受け止めながら、向かいのビルへ、跳ぶ。飛距離はたった数メートル。しかし、高さ足場が少しのミスも許さない。着地点はフェンスの上。バランスも崩さずに再度、走る。

うなじを走るちりちりとした感覚は、まだなくなっていない。背後の視線から、無遠慮に僕の近くに踏み込んでくるマスコミから、逃れなければ。彼女の元に行かなければ、なくなってはくれない。

不意を突かれたらしいヘリが、今更のように動き出した。この短い時間で広げた程度の距離では、スペックの差で簡単に埋められてしまう。フェンスの上を走ろうと、ビルからビルへ飛び移ろうと、ヘリで追われれば逃げ切れるわけがない。走る、という、人と同じ移動方法を使うなら。

だけでも。しかし。忘れてはいけない。僕は、都市伝説として語られる存在だ。この名前を気に入っているわけではないけれど、むしろ大嫌いな名前で、愛着なんかこれっぽっちもないけれど。

僕はナイトダイバーだ。

スピーカーからの声は、もはや聞き取れない。リポーターが何かを叫んでいるらしいことは、なんとなくわかる。一枚の壁を間に挟んでいるかのような、ぼんやりとした、それでも本物の緊迫感に満ちた言葉。

それら全てを置き去りにして——ビルの狭間、漆黒の闇が横たわる、街の暗部へ。飛び込んでいく。頭から。

落ちる？ いいや、違う。沈む。闇の中へ、影の中へ沈む。潜りこむ。周囲

の黒と、自分が同化する感覚。世界へ溶けていってしまうような。  
ナイトダイバー。夜に潜る者。  
その名の通りに、僕は闇に潜り、溶け、そして次に浮上するときには――

「こんばんは、イトダくん」

澄んだ声が、影から浮上した都市伝説の耳に染み入った。

オレンジを中心とした、明るい色遣いの部屋だ。窓を覆い隠すカーテンも、その影が落ちるカーペットも、心を陽気にさせるビタミンカラー。

その中に、一滴の墨が落ちた。

より正確に言えば、カーテンが落とした影から、滲み出た。

ナイトダイバーが目を開く。生気を感じさせない白い瞼の下から現れる、漆黒の瞳。目元の他は、鼻も口も首も、黒い包帯によって隠されている。顔にかかった長い前髪をかき上げた手すら、隙間なく包帯で埋め尽くされていた。その上にまどついているのは、サイズの合っていない大きな長袖Tシャツと、スキニーパンツ。身に着けているものはことごとく黒く、生身であるはずの目元が唯一、彼の中で異彩を放つ白だった。

誰にも実体を掴ませないような姿ではあるが、ナイトダイバーは人間と変わらない形をしている。目元や体型から、二十歳前後の青年と言えらるだろう。ハロウインの時期なら、人混みに紛れるのも可能かもしれない。

彼——ナイトダイバーはつい数瞬前まで、ターミナル駅のすぐ前にて、マスコミのヘリと一分に満たない鬼ごっこを行っていた。影から影へ移動することが可能な、彼ならではの逃亡方法を使って逃げ込んだ先がここ。澄んだ声でナイトダイバーを親しげに呼ぶ、一人の少女の自室だ。

「だから、その呼び方はやめてくれないか」

「いいじゃん。これが一番、普通の名前に聞こえるんだから」

唇を尖らせながら、机の前の安っぽいデスクチェアに座った少女が言う。仕事の割に口調は楽しげで、悪気も全くないようだ。

都市伝説・ナイトダイバー。その名の内の三文字を取って呼ぶ少女の名は、<sup>ゆうな</sup>優菜。胸まで伸びた髪はキャラメルブラウン。前髪が邪魔にならないように、蝶を模ったオレンジの髪留めでまとめている。着替えるのを面倒くさがるため、家に戻ってきて緋の制服を着たままだ。夕食前の入浴を済ませるまで部屋着、というか寝間着にはならない。

会うたびに交わしているやり取りに、ナイトダイバーがため息をつく。何度も繰り返された会話だが、優菜の態度は一貫して変わることがない。だから折

れるのはいつもナイトダイバーで、その様子を見て優菜が満足げに微笑むのが、二人が顔を合わせた時のパターンになっている。

「それにしても、大変だったね」

「なにが？」

「テレビ。久々に出たねー、都市伝説特集。夜のビル街を走る、謎の人影の正体とは!? って」

ナレーションの声を真似ているのか、優菜の口調は途中から仰々しく大袈裟になっていった。再度、包帯の下でナイトダイバーは嘆息する。

ブームというのは面倒なもので、一度火がついてしまえばあらゆるメディアが一つの物事についての最新情報を取り入れようとする。実際、一年前にナイトダイバーの存在がテレビの流行になった際は、空を飛び交う全てのヘリに怯えるはめになった。

彼らマスコミの熱がある程度冷めた最近では、ナイトダイバーも比較的自由に街を走り回れるようになっていたのだが。

「ブームの再燃にしては間隔が短い……視聴率が稼げなくなったかな」

「イトダくんから『視聴率』とかいう言葉が出てくると、なんかへんな感じ」

「僕を何だと思ってるんだ、優菜は」

「……都市伝説？」

首をかしげながら言う少女に呆れつつも、ナイトダイバーはいつの間にか苛立ちが消えていることに気づいていた。マスコミのヘリに追われている最中は、どうしても消えなかつたうなじの緊張が解けている。

やはり、自分はここだと安心できるのか、とナイトダイバーが自己分析していると、

「都市伝説といえは」

優菜が思い出したように話題を展開させた。

「ナイトハンターっていうのが、最近のはやりだね」

黒の包帯の下、見えない口が息をのんだ。数瞬空いた間を埋めるように、のんだ息を言葉と同時に吐き出す。

「僕の偽者でも出てきた？」

「イトダくんよりも物騒だよ」

くるりと椅子ごと体をまわして、優菜は机上のパソコンを操作する。その動作に合わせて、キャラメルブラウンの髪が弧を描いた。

キーボードをタイプする指が走る。ナイトダイバーは少女の背後に近づき、

少女が検索を終了させるまで、机に飾られたコレクションに目を向ける。細かく仕切られたガラスケースの中に、様々なヘアアクセサリーが並んでいる。売り場の一角をそのまま持ってきたような統一感。優菜の趣味で集められ、愛用されているオレンジ色の髪留めたちだ。一つだけスペースが空いているのは、今使われている蝶のバレッタが入る場所なのだろう。

明るい色彩からパソコンのモニターに目を移せば、黒ベースの怪しげなサイトが映っていた。数回リンクを移動し、たどり着いた先には、優菜の言った「ナイトハンター」の文字。どす黒い赤のフォントが不気味さを煽る。

「最近、行方不明者が続出してるとってゆーの、知ってる？」

「さっきニュースでやってた」

「その原因なんじゃないかって、ネットで大騒ぎなの」

ごく一部でね、と付け足して、優菜は画面をスクロールさせる。個人で集めた情報がまとまったサイトなどではなく、不特定多数が掲示板に情報を投稿する形らしい。長文の目撃情報から短文の反応まで、まとまりのない書き込みがちらちらと並んでいる。

軽く目を通してながら、ナイトダイバーはひそかに苦笑していた。目撃された場所、目撃されたモノの見た目。彼にはどちらも覚えがある。ただ——これはナイトダイバー本人にしか分からないことだが——ちぐはぐだった。

主観が違うだけで、こうも綺麗にちぐはぐになってしまふのかと、呆れを通り越して、すごいなと思うってしまうほど。

おおざっぱに言えば、全て「見たこともない生物が、夜の闇から現れて、人をさらっていくのを見た」という情報にまとめられる。ただ、その生物の見た目とか、見た場所とか、時刻が少しずつ違うだけだ。

「証拠もないし、現実味がない話だから、警察とかにも相手にされてないらしいし、ニュースもまだ取り上げてないけど——」

「ストップ」

優菜の言葉を遮るように、ナイトダイバーが突然口を開いた。おそらく反射的に出た手が、マウスを操る優菜の右手に重なる。

「えっ、ちよつと、なにっ」

ナイトダイバーの突然の行動に、優菜が上ずった声をあげる。彼らの右手は恋人同士のように重ねられていた。ナイトダイバーの手は、長い袖のせいで指先しか出ていない。心拍数が跳ね上がった優菜は、空いた左手と顔をせわしなく動かすが、原因であるナイトダイバーが気にする様子はなかった。

気にする余裕がなかった、とも言える。パソコンのモニターを見つめる彼の横顔を見た優菜が、慌ただしかった挙動を止めたほど。歓喜と憎悪、困惑と希望を詰め込んだような、複雑な瞳だと、優菜は思う。こもった感情は不安定なのに、視線はまっすぐに一点を貫いている。

追って、優菜はモニターに目を向ける。真っ黒な背景。どす黒い赤のフォント。都市伝説ナイトハンター。その下に綴られた、いくつもの書き込み。あふれかえった大量の目撃情報。その中の一つが、モニターの中心に。

俺、この掲示板ずっと見てたんだけど、やばい。俺も見ちゃった。たぶん、社会人。スーツ着た二十歳くらいの男が、裏路地に引きずり込まれてった。夜十一時くらいだったと思う。

引きずっていったやつが、ナイトハンターだと思うんだけど、変なんだよ。ここの情報ずっと見てたから分かるけど、あれってほとんど獣型なんだから。でも俺が見たのは人っぽかった。いや、完全に人ってわけじゃなくて、体は全部爬虫類っぽいウロコに覆われてて、下半身が蛇。上半身が人間なんだ。

で、顔のところだけ妙に人間っぽくって、ウロコがねーの。長い紫色の髪しててさ、よく見えなかったんだけど、あいつの笑顔がヤバかった。いや、ナイトハンターの時点でヤバいんだけど、なんかもう、人ってこんな表情でできるんだなって感じ。確かにあいつは人じゃないんだけど、形が人だったからさ、気味悪くて仕方なかった。夢にも出てきやがったよ、あいつ。

ナイトハンターがなんなのかは分かんねーし、なんのために人をさらうのかも分かんねーけど、あいつは、なんていうか……

すごく、楽しんだ。人をさらって何すんのかは知らねーけど、誘拐、つか、あいつらからしたら「狩り」なのか。それを楽しんでる感じがする。ふざけんなって思う暇もないくらい、俺はビビっちまってたわけだけども。

とりあえず、あいつはヤバイ。ヘタに人間っぽいやから、たぶん他のナイトハンターよりヤバイ。俺が直感しただけだから、「何が」って言われても答えられねーけど。

見たのは、そーいや、確か前にも目撃されてた場所だったな――



翌日、夕刻。

世界を赤く染め上げていた太陽の勢力は、だんだんと衰えて西に追いやられていた。辺りはゆっくりと、しかし確実に闇にのまれていく。夜の訪れを感知したのか、一斉に光りだす街灯。

冬だなあ、と優菜は思う。下校時間は変わらないが、夏と冬で帰り道の明るさが全く違う。一、二ヶ月前までは、まだ明るかったくらいの時間帯だということに。

太陽と比べれば、街灯が照らす範囲など微々たるものだ。優菜の足は自然と速くなる。歩調に合わせて跳ねる、キャラメルブラウンの髪。蝶の形をしたオレンジの髪留め。紺のスカート。学校指定の学生鞆。優菜が街灯の下を通るたびに、LEDの光が彼女にハイライトを入れていく。

駅から彼女の家であるマンションまでは、徒歩にして十分程度。それなりにいい立地ではあるが、決して大きな駅ではないため、道路の照明は心もとない。一つのデパートを中心に、いくつかのコンビニとファーストフード店が並ぶ駅前を通り抜ければ、何の変哲もない住宅街に出る。優菜が今歩いているのは、マンションと一軒家が立ち並ぶ一角だ。家まであと五分、といったところか。

家路を急ぐ中、優菜の思考を埋めるのは、昨夜のことだ。ネット掲示板の書き込み、異常な反応を示したナイトダイバー。彼と、目撃情報を見比べて、優菜は直感した。このままだと彼は、どこか遠くへ行ってしまう。

だから、部屋から出ていこうとするナイトダイバーを引き留めたのだ。「まだヘリが飛んでるかもしれないから」とまで言って。

夜の東京には、街を知り尽くしているはずの大人にも、都市伝説とコミュニケーションをとれる唯一の人間である優菜にも、知らないことがある。

それを知っているのがナイトダイバーで。だから彼は、あの書き込みを食いつけるように見つめていたのだ。

紫の髪を持つ、人と蛇を組み合わせたような異形。それが、ナイトダイバーにとって何を表すのか、優菜は知らない。

とにかく早く帰ろう、とローファーが速度を上げる。日が沈んでしまったから、きつとナイトダイバーはどこかへ出かけてしまっただろう。おそらく、あの掲示板に書いてあった場所に――

「あ……」

駆け足に近かった優菜の足が、漏れた声と共に止まる。追い越していった自転車通学の男子学生が、急に止まった優菜を訝しげに見つつ走り去る。

優菜の視線は、一軒の家屋の屋根へ向けられていた。これといった特徴もない瓦屋根の上に、不自然なシルエットが浮かびあがっている。一メートル近い体高。犬というよりは狼に近いだろう。東から昇っている途中の月が、その向こう側で光っている。満月には届かない、少し欠けた月。

学生靴の持ち手を、優菜は無意識の内に握り締めていた。彼女が異形を見たのは、これが初めてではない。昔から——それこそ、ナイトハンターがネット上で話題になる前から見てきたし、だからこそ、それらを避けて歩くこともできた。自分の身を守るためのすべなら、心得ている。

しかし、今の状況は普段と少しばかり違っていた。優菜を抜いていった自転車が、屋根の上から道路を見下ろす巨大な狼の目の前を通ろうとしている。あの狼は、ナイトハンターと呼ばれる「人に危害を加えるモノ」かもしれない。優菜は「行方不明」の現場を目撃するかもしれない。

狼が鼻先を自転車へ向ける。

——男子学生は気づかない。

座った状態のまま、前肢で足踏み。

——自転車が狼へと近づいていく。

わずかに顔の角度が変わり、金の瞳が月光を跳ね返す。

——ナイトハンターの目と鼻の先を走り抜けた。

静寂。静謐。ひっそりとした夜。自転車の前照灯が揺れる。

男子学生が角を曲がり、狼が一つあくびをして、ようやく優菜は止めていた息を吐き出した。力がこもっていた手を軽く振り、深呼吸を繰り返して緊張をほぐす。ひとまず、誰かがナイトハンターに捕らえられる場面は、見なくて済んだ。あとは、自分の身を守ることを考えればいい。

幸い、住宅街の道は複雑に入り組んでいる。最短ルートなどにこだわらなければ、ある地点を避けて通ることは難しくない。それでもなるべく早く家に着くような道順を考えて、優菜は近くの角を曲がった。

街灯の数が少しばかり減るが、この際仕方がない。速足で歩を進め、次の角を曲がったところで、

「キミが、橋越優菜かい？」

背後からの問いかけに、優菜が振り返る。

逆光。LEDの灯が、声の主の後ろで強い光を放っている。瞬間白く染められた視界の中で、辛うじて捉えられたのは——紫の、長い髪。

「——っ！」

「おっと。騒いじゃあ、いけないよ」

優菜の喉から出かかった声は、紫のウロコに覆われた手が口を塞いで封じてしまった。逃れようとしても、優菜の力では振り払えそうにない。

「聞き分けの良い子が好きだよ、私は」

身勝手なことを言って、人外は笑う。金の瞳の瞳孔は縦に割れ、爬虫類の不気味さで優菜を捉えていた。生物的な恐怖心を煽る目を持つていながら、人外の相貌は作り物のような美しさを備えている。その後ろ、頭の向こうで揺れるのは、太い蛇の尾。片手で顔を固定された優菜には見えないが、ウロコで覆われた人外の下半身は、蛇のそれと同じだった。

あいつだ、と優菜は思う。昨日、掲示板で語られていた、あいつだ。しかし、何もできない。彼女はナイトダイバーに何かを知らせる術を持たない。持っていたとして、目の前の存在がそれを許すとは思えない。

それ以前に。

もし仮に、ナイトダイバーとコンタクトが取れるとして、彼が来ればこの状況を打破することはできるのだろうか？

「申し訳ないが、君には餌になつてもらいたい」

餌。その言葉に優菜の肩が跳ねる。人をさらったナイトハンターが、人をどうするのかは、いまだに分かっていない。

食われるかもしれない。予測が少女の体を縛る。しかしその恐怖は、次の一言で全く別のものに変更された。

美しくも不気味な顔が、歪んで、ひしゃげて、笑みを作る。

「ナイトダイバーを釣るための、餌にね」

優菜の口を押さえた方とは逆の手で、人外は優菜の頭に手を伸ばし——

「……違う」

足元に目を向けながら、ナイトダイバーはぼつりと声を落とした。

アスファルトで舗装された地面に横たわっているのは、熊のような体躯を持つナイトハンターだ。下顎からはみ出した猪のような牙が、普通の熊ではないことを物語っている。

だが、それはナイトダイバーが探していたモノではなかった。目を細めて、熊に視線を向ける。

場所を間違えたわけではないはずだ。間違えるはずもない。

通常、ナイトハンターは他の生物同様に、縄張りというものを持つ。それは、各々が自らの獲物を確保するための狩場であり、互いに警戒心や敵対心を刺激し合わないためのパーソナルスペースでもある。だから、滅多なことがなければナイトハンターは自らの縄張りから移動しないし、わざわざ縄張りを広げようともしない。

その性質から考えると、目撃された場所に行けば遭遇できる確率は上がるはずだった。だがしかし、実際に情報通りの場所にいたのは紫髪の人外ではなく、大きな牙を持つ熊だ。ナイトダイバーは思考を巡らせる。

何かを見落としているのではないだろうか。あるいは。

「畏、か？」

口に出した途端に、ナイトダイバーの背筋を冷たいものが走った。ありえない、とは言い切れない。むしろ、紫髪の人外の性格をよく知っているナイトダイバーだからこそ、否定できない。

たとえば、わざわざ人に目撃されるような行動を取っていたとすれば。

たとえば、他のナイトハンターの縄張りでそうした行動を取っていたら。

たとえば、ナイトハンターの目撃情報を人がまとめていると知っていたら。

たとえば、その情報を知ることが、彼にも可能だとわかっていたら。

通常、ナイトハンターが人に目撃されるには、ある一定の条件をクリアしなければならぬ。ナイトハンター自身が、自ら、能動的に、人に触れる。その状態であれば、たとえ靈感がなかりと、魂だけの存在を視覚できない体質で

あろうと、人はナイトハンターの存在を見ることができるようになる。

だから、ナイトハンターが気をつければ、彼らが人に見つかることはほとんどない。その性質を理解した上で、わざと人に見撃された可能性がある。

浮かび上がる仮定。否定する材料はない。むしろ、見落としている部分の方が多いのではないか。包帯の奥で、噛み締めた歯が軋む。

事実、掲示板にも書いてあったはずだ——『確か前にも目撃された場所だったな』と。つまり、他のナイトハンターが、具体的に言えば地面に横たわる熊の姿をしたナイトハンターが、すでに縄張りとしていた場所だった。そう考えられる。

ならば、ナイトダイバーをこの場におびき寄せた理由は。

ただナイトダイバーと会うための罠だったのなら、もう姿を現してもいいはずだ。姿を隠す必要もない。

それ以外に、理由を見出すとすれば。

「——優、菜？」

ぽつり、と口を出た言葉を、ナイトダイバーの思考は即座に否定する。

ありえない——だが、それを確信させる要素はこれといってなかった。推測というよりも願望に近い。予感と予測は嫌な方向へと向かっていく。

辺りはすっかり暗くなっている。優菜が帰宅していても、おかしくはない時間帯だ。不安を抱えたまま、黒の包帯で表情を隠した都市伝説は、熊のナイトハンターの体が作り出す影へ潜り——優菜の部屋に、浮上する。

ビタミンカラーのインテリアが目に入った。紺の制服をまとった少女は、いない。まだ帰っていないのか、とナイトダイバーが一息つこうとした、その瞬間に、彼は見た。

机の上。

パソコンのモニターの前に置かれた、蝶の形をしたオレンジの髪留めを。

おかしい、とナイトダイバーは視線をわずかにずらして、ガラスケースに目を向ける。仕切られた中身の、空いているスペースは一つだけだ。新しいものが増えた様子もない。

オレンジのヘアアクセサリーは、優菜のチャームポイントでもあった。外に出る時も、部屋にいる時も、外す必要がなければ外さない。だから、ケースから出したのに朝付け忘れるという線も、薄い。

加えて、部屋を見回した限り、学生鞆はどこにもなかった。机の脇に備え付けられたフックにも、真っ先に投げそうなベッドの上にも、もちろんデスクチ

エアの上にもない。

嫌な予感、そのまま確信になった。長い袖の中で、拳を握りしめる。  
「スメラギ……！」

黒い包帯の下、食いしばられた歯の隙間から。彼が追求める人外の、ナイトハンターの名が、こぼれた。

優菜は首を反らして夜空を見上げた。細い路地から見上げる空は高層ビルに蝕まれて狭く、まだ昇りきっていない月は視界に入らない。星は地上の光に駆逐されて一つも見当たらず、丁度上空を通りかかったらしい旅客機の点滅が、ゆっくりと通り過ぎていった。

キャラメルブラウンの髪をまとめていたバレッタは奪われ、長い前髪が顔にかかっている。両手を背中で押さえられている状態では、払うこともできなかった。もつとも、そんなことを気にしている場合でもないのだが。

「橋越優菜。キミにだけ、教えてあげようか」

彼女の背後に立つナイトハンターが、唐突に言葉を落とした。優菜の両腕を片手で押さえ、薄汚れたアスファルトに蛇の下半身を横たわらせる人外の名は、スメラギ。

彼は、優菜に向かって名乗る際にこう言っていた。「私がキミの名前を知っているだけでは、なにかと都合が悪いだろう？」と。友好的であるのかどうか、疑わしい調子で。現に、優菜を後ろ手に縛るスメラギの手は、少しも緩みはしなかった。

「この場所は——都市伝説・ナイトダイバーが生まれた場所なのだよ」  
ずるり、と蛇の尾が道の上を這った。

スメラギの言葉に、優菜は改めて周囲を見回す。車一台通るのがやっとの、完全な一方通行の路地。とは言うものの、実際は不法に投棄されたガラクタが散らばっている。通るのは自転車がやっただろう。今は、優菜とスメラギ、そして彼らの足元の学生鞆が道を塞ぐ形で立っているため、仮に通行人が来たとすれば、道の端へ寄りなればすれ違ふこともできない。

そんな廃れた裏通りのせいかな、そこを照らす街灯は、LEDへの変更すら行われていなかった。固定された光源は切れかかった電球しかなく、不安定。大通りを走る車が放つ光の方が、確実に視界を確保してくれる程だ。

表通りの華々しさを、引き立たせるための場所のような、言ってしまうえば掃き溜め。細すぎる路地が使われる可能性は極めて低いいため、整備が後回しになるのは仕方ないことではあるが。

「そう、あの日の彼は、不本意だがこの道を使っていた。たぶん、用事か、待ち合わせか。彼を急がせる何かがあったのだろうね。でなければ、こんな道は

通るまい」

半ば独白のように。楽しかった思い出を振り返っているかのように、スメラギは語る。演技がかった丁寧な口調こそそのままだが、声音の中どこか楽しげな色が入っていることを、優菜はなんとなく感じていた。

同時、わずかな違和感が彼女の胸の中で湧きあがった。ナイトダイバー。都市伝説として語られるモノ。彼と話すことは多くあっても、その起源について優菜は知らない。元々、彼女の目は生物というカテゴリに属さない、少し特殊な存在も捉えることができる。もっと簡単に言えば、彼女には霊感がある。「幽霊」や「変わったいきもの」なら、幼い頃から見続けていた。その「変わったいきもの」が今は「ナイトハンター」と呼ばれ、ナイトダイバーはその中で唯一他の人にも見えて、かつコミュニケーションも取れるだけの存在だったのだ。だから、その起源について、優菜は少しの疑問も持たなかった。持てなかった。ヒトの形をしているとはいえ、あまりにも人間くさいナイトダイバーの言動に気付いても、不思議に思うことはなかった。

「——おや、今更知ったのかい？」

スメラギの言葉が優菜に刺さる。じつとりと手が汗ばんでいるのを感じたのだろう。彼女が振り返ることすら許さず、スメラギは口の端を吊り上げる。

嘲笑。楽しげに。哀れむように。誰にも表情を見せることなく。

「彼は、キミたちの言うナイトダイバーは、人間だったのだよ」

優菜の耳元で、囁くように。紫の長い髪が紺の制服の肩に触れた。

「影から影へ移動できるのは、肉体という枷から解放されたからだ。私が彼を解放した。それまでは、何度も失敗したさ——人間としての自我を保ち、かつ実体を維持できるレベルまで、魂を濃く、強くしなければならぬ。いくつもの人間の魂が霧散していったよ。私の手の中でね」

でも、と続けて言うスメラギは、過去に陶醉しているようだった。空いた手で、優菜の腕を、肩を、首を、なぞる。蛇が体を這い上がってくるような感覚に優菜は身をよじる。しかし逃げられない。

「ついに、成功した。二年前、この場所で！ 彼は、唯一の成功例なのだよ。私のものだ。キミごときに、渡すわけには……！！」

「いっ……！！」

腕を締め付けられ、優菜の口から苦悶の声漏れる。

ぢぢ、と街灯の電球が音を鳴らし、明滅。

数秒の間、路地は闇に包まれた。



ぬばたまの黒。そこからさらに黒が滲む。

影から浮上した人影。眼光一闪。怒りを孕んだ瞳が。

「優菜を離せ、スメラギ」

人影の中で唯一異彩を放つ白が、暗い裏通りで浮かび上がる。

ビルの間を通り抜けた風が、黒髪を揺らす。

次いで、サイズの大きなTシャツの裾と袖が。

追って、留められずに垂れ下がった黒の包帯が。

真正面からの風を受けて、都市伝説・ナイトダイバーは、優菜とスメラギの前に現れた。唐突に、何の前兆も予兆もなく、それこそ闇から生まれ出たかのように。見開かれた黒瞳に、怒気を湛えて。

「離せ」

繰り返された言葉に、優菜の肩が跳ねる。落ち着かせるようにその肩を撫でるのは、彼女を捕らえているスメラギだ。

ついさっきまで、優菜に対して嫉妬のような感情を向けていたというのに、ナイトダイバーを前にした途端、一変した。愛しい我が子をたしなめるような、柔らかく棘を隠した口調。

「駄目じゃあないか。ご覧、こんなに怯えてしまっている」

「お前がさつさと優菜を離せばいいだろう」

「そうはいかないよ、ナイト・ハンター」

スメラギの金の瞳が、細く笑みの形を作る。

彼の言葉に反応した優菜が顔を動かした。不安と驚愕が混ざり合った目。一度スメラギに向けた視線を、ナイトダイバーに戻す。その様子を見て笑みを深め、スメラギは歌うように。

「――ああ、違う。違うよ橋越優菜。キミたちの言う『ナイトハンター』と、私たちが言う『ナイト・ハンター』は、違う。全くの別物だ。同様に、キミたちにとつての『ナイトダイバー』と、私たちにとつての『ナイト・ダイバー』もまた違う。心地いいほどにちぐはぐで、すれ違っている。むしろこれは、誰かの皮肉なんじゃあないかな？ そう思わないかい、ナイト・ハンター」

返答は、ない。

切れかかった電球が、再度、路地に暗闇を生み出した。

フィラメントの焼ける音。最後の足掻きとばかりに街灯が光を放ち、

「僕は」

瞬間生じた闇を潜ってきたナイトダイバーが、優菜の肩を掴む。数歩の距離ならば、影に潜って浮上するのに一秒とかからない。都市伝説に挟まれた少女の頭上で、黒と金の目が睨み合った。

「お前の演説を黙って聞き続けるつもりなんてない」

「残念だな。私は一つの提案をしてあげようと思っていたというのに」

大仰にため息をついて、スメラギは肩をすくめる。

「私はね、この娘を——橋越優菜を、キミと同じ存在にしてあげようと思っていたのだよ」

漆黒の瞳が見開かれる。

対して黄金の瞳は細められた。

「素晴らしいだろう？ 肉体という枷からの解放。キミは本当の同士を見つけるわけだ……ヒトならざるものを、ね。ああ、失敗については心配しなくていい。キミ以来、数回の失敗は繰り返しているが……橋越優菜は私たちのような魂のみの存在を感知する目も持っているからね。きっと良い結果になる」

スメラギの言葉が終わる。その後、ぞんつと空気の裂ける音が、路地の空気を震わせた。アスファルトの上に赤が一滴、二滴。

優菜の首を掴んでいたスメラギの手が、彼自身の頬に触れる。一筋走った赤い線から伝い落ちる滴に。吊り上がった口の端から、先が割れた蛇のような舌が現れた。赤のついた指先を、血液が付着したウロコを、舌が這う。

ナイトダイバーの表情は変わらない。

「言ったはずだ——」

漆黒で包まれた首元。その鎖骨と思しき場所から、黒は伸びていた。

刀を思わせる鋭さで、ナイトダイバーの首元から生え、優菜の頭上を通り、スメラギの頬を裂いたのは、黒い包帯。

「お前の演説を聞くつもりは、ない！」

断言した声は、半ば叫ぶように。

言葉と共に、黒に覆われた左腕が奔る。

——力尽きた街灯。細い路地は闇に包まれた。

同時、袖口から伸びた包帯が鞭のように振り抜かれる。

——闇の中、わずかに光る金の瞳は下へ。

黒は風を裂き、紫の髪を斬り、役に立たない街灯を両断。

——蛇の体がアスファルトを這う。

ナイトダイバーから距離を取ったスメラギは、優菜の手を意図せず解放していた。呆気なく切断された街灯が倒れ——金属とコンクリートがぶつかり合っ  
て鳴り響く高音。狭い路地では倒れ切ることができず、向かいの建物にぶつか  
って停止した。細かく砕けたガラスが道路に散らばる。

左腕から放った包帯をビルの外壁に突き刺したまま、ナイトダイバーは優菜を  
右手で引き寄せて背にかばう。視線はスメラギに向けたまま、

「……僕の後ろにいてくれ」

一方的に告げて、手を離す。直後、首元と左の袖から伸びていた包帯は、意  
志を持っているかのように元の場所へと戻っていった。一度まばたきしてしま  
えば、どの包帯が放たれていたのかも見分けがつかない。

優菜は、ナイトダイバーを呼び止めようとして——言葉が見つからなかった。  
喉まで出かかった「イトダくん」という呼び名を、無意識に飲み込んだ。呼び  
慣れた名で、彼を呼べる気がしない。

「ナイトダイバー」という名前は、あくまでも人の主観に立って彼を見たと  
きの呼び名だ。「ナイト・ハンター」は、スメラギが呼んだものだ。彼にとつて  
は——おそらくではあるが——気に入らないものだろう。

そうだとすれば、彼を示す名前は、名称は、何になるのだろうか？

彼が人間だったことを知ってしまったから、優菜は呼び止めることができな  
い。たとえ考えすぎだったとしても、かつて呼ばれた名があるということだか  
ら。今の名は、偽りのものでしかないのだから。

少女の逡巡に気付く様子もなく、ナイトダイバーはスメラギに一步近づいた。  
光源のなくなった裏通りは暗い。隣の大きな道路を通る車のヘッドライトが、  
時折差しこんで倒れた街灯を照らしていく。

ばつさりと髪を斬られたスメラギは、路地を斜めに塞ぐ街灯の向こう側で闇  
に紛れている。たまに差しこんだ光に照らされて見えるのは、怪しげに光を返  
す金の瞳と、歪められた唇。蛇の体が這う音が嫌によく聞こえるのは、ナイト  
ダイバーとスメラギの間で会話が交わされていないからか。

「暴力的だな、ナイト・ハンター」

スメラギが闇の中から言葉を放つ。

親しみも慈しみも感じられない、冷たい口調に変質していた。感情の起伏も  
ない、平坦な、体温のない声。冷たい蛇が素肌を這い上るような寒気を、聞く  
者に与える声だ。

震え、跳ねそうな肩に力を入れて、

「当たり前だろう」

足をもう一度踏み出して、ナイトダイバーが返す。

自分に忌むべき名を与えたモノに向かって。自分を、■■■■という人間を、殺したモノに向かって。

脳裏に浮かぶ二年前の光景を振り払って、ナイトダイバーは宣告する。

「僕は、ナイト・ダイバーを狩る者。ナイト・ハンターなんだから」

告げて、黒に包まれた都市伝説は影に潜り、次の刹那――

道路を舗装するアスファルトが粉碎した。

影からの浮上と同時に振り下ろされた、ナイトダイバーの踵が地面に突き刺さっている。その影響で生じた轟音と小規模な揺れは、表通りを走るトラックに掻き消された。

右足首までを道路にうずめたまま、ナイトダイバーは姿勢を低くする。直後に頭頂部を掠めていくのは、ウロコに覆われたスメラギの手。ちぎれた数本の黒髪が宙を舞い、ナイトダイバーが眉を寄せる。

その様を見下ろして、スメラギは唇を歪めて笑みを浮かべ、  
「痛みを感じるかい？」

一音一音、全てに意味を含ませるかのように、意味深に、問う。

今度こそ、ナイトダイバーの肩が跳ねた。喚起された過去の断片が脳裏に瞬く。フラッシュバック。それは、ぞっとするほど鮮明に。

——『キミは二十二番目の被験者だよ』——

——暗闇での邂逅。ヒトと蛇の人外。体は恐怖で動かない。——

——『やめ……!』——

——『成功させる。今度こそ、今回こそ!』——

——蛇のように絡み付く腕から逃れる術は、ない。——

——『う、ああああああ!!』——

——『まだ、痛みを感じるかい?』——

——体が崩壊する。器を突き破って魂が外に放たれる。——

——『ッ……!』——

——細い路地を、電球が照らし出す。街灯の下で蛇の体が這う。——

——『ようやくこの時が……!!』——

——その時にはすでに、彼はヒトではなくなっていた。——  
——別の何かに、存在を変えていた。——

——『おめでとう』——

——『キミが初めての成功例だ』——

数秒間の思考停止。過去に体を縛られたナイトダイバーは、決定的に、致命的に隙だらけだった。

止まったナイトダイバーに、蛇の尾が横から叩きつけられる。防御の体勢も取れず、くの字に曲がった体がビルの裏口を突き破った。設置されたデスクに当たってようやく停止。書類が落ちて床に散らばる。

「覚えていたようだね、二年前の痛みを」

破壊された扉の上を通って、スメラギは笑みを浮かべる。

「いや、忘れるはずもないか。なにせ、生きたまま肉体が崩壊していったのだから。想像を絶する痛みだったろう」

「……肉体を持ったこともないお前が言っても、説得力がないな」

デスクチェアの背もたれに手をかけて、ナイトダイバーが立ち上がる。気を抜けば膝から崩れ落ちそうだ。体の各所から包帯を伸ばし、地面に差して杖代わりにする。

「確かに、肉体を持たず魂のみで存在することにも、デメリットはある、か。髪もウロコも服も、自らの体の一部となる。髪を少し切られただけで、体の一部を失うのと同義になるのだから」

そう言っつてスメラギは短くなった髪に触れ、

「なかなか痛かったよ、ナイト・ハンター。相変わらず聞き分けの悪い子だ。そんな子に生んだ覚えはないよ」

「じゃあ、やっぱり僕も失敗作だったんじゃないのか？」

「……なるほど。それならば」

縦に割れた瞳孔が広がる。光源のないオフィス内で、不気味に光る金の瞳。

口の端を吊り上げて、スメラギは楽しげに。

「造りなおす必要があるね」

それこそ、声の高さが一オクターブ上がったのではないかと錯覚するほど、楽しげに言い放った。ナイトダイバーに向かい、オフィスを滑るように移動する。手を伸ばす。

対して、

「お断り、だっ！」

ナイトダイバーは体を支えるために使っていたデスクチェアを、スメラギに向かつて投げつけた。軋む体を無視して包帯を地面から抜き、周囲の椅子に巻きつけ、持ち上げる。

スメラギは、触れたものの魂を変質させることによって、ナイトダイバーを作りだした。だから、「造りなおす」という行為にも「接触」が絶対条件になる。

と、ナイトダイバーは推測する。

そして、彼の包帯や服は、彼自身の魂で組成されている。触れられれば最後。『失敗作』として霧散するか、『成功作』としてスメラギの支配下に置かれるかの二択だ。

無論、どちらの結末も受け入れるつもりはない。足に力を入れて、ナイトダイバーは第二波を投擲。

最初に投げた椅子は悠々と避けられた。二波を見たスメラギが、少しだけ目を見開いて、直後には笑みを浮かべる。

第二波も容易に避けるであろうことを予測して、ナイトダイバーは影に潜りこみ、ファイル類が詰め込まれた棚の上に浮上する。蛇の機動力をもって全ての椅子を掻い潜ったスメラギの頭上、転倒防止用のストッパーを包帯で切断。天井に手をつけて棚を蹴り倒す。

再度見開かれた金瞳と目が合う。かなりの重量を有する棚は、もう止まらない。緩やかな落下に逆らわず、ナイトダイバーは棚の上部が直撃したデスクの向こう側に着地。高い場所にたまっていた埃が撒き散らされる。

いまだに残るダメージを振り払いながら、スメラギのいた場所を振り返る。壁に接していた棚の背が露わに。少し光があれば、日焼けしていない壁紙を見ることができただろう。散らばった書類、破壊されたパソコンのモニターが痛々しい。ひしゃげたデスクの引き出しは、もう二度と開かないだろう。

舞い上がった埃が落ち着き始めた頃、ナイトダイバーは腰を落とした。重心を低くした臨戦態勢。視線の先で棚の背が持ち上がる。包帯の下で眉をよせ、近くのデスクチェアに手を伸ばす。目を向けた先では棚の上昇が止まらない。下から覗くのは金の瞳、体を覆うウロコ、蛇の尾。

「やっぱりキミは、失敗作だったのかもしれない」

片手でアルミ製の棚を持ち上げ、スメラギはむしろ淡々と述べる。裂けた額から流れ出た赤が、吊り上がった唇を横切つて顎に伝う。

「ナイト・ハンター。改良の余地がありそうだね。生み出した者に対してこんなに暴力的になるとは、いや、最初から分かっていたことではあったか。ナイト・ハンター。ナイト・ダイバーを狩るもの。その名を付けたのは他でもない、私だ。そう考えると、やはり——」

独り言のように。自らの考えを淡々と、坦々と、並べ、連ね、重ねていく。ただそれだけの言葉。そこに聞き手が介入する余地はない。たとえ当事者であったとしても。

ぐしゃり、と薄い棚板が握りつぶされた。実用性のみを追求した武骨な書棚が掲げられ、振りかざされ、

「その本質を変える必要が、ある」  
軽々と、投げ飛ばされる。

防御の体勢をとる暇もない。包帯を使えば決定的な隙になる。

ナイトダイバーはやはり、影に潜りこむ。一旦距離を取り、相手を戦闘不能状態にするだけの策を考える必要がある。オフィスの角に浮上し、そこで金の瞳と目が合った。

「——ッ!？」

「分かりやすい動きだったよ、ナイト・ハンター」

状況を把握しきれないナイトダイバーの首を、スメラギの手が掴む。そのまま背後の壁に叩きつけられ、瞬間、視界が眩んだ。みしみしと音を立てて軋んでいるのは、不可をかけられた壁か、あるいはナイトダイバーの体か。

「触れられればキミの負け。そうなれば、距離を取るのは当然だ。そう考えれば、むしろ触れるのはたやすい」

さて、と言葉を区切つて、スメラギ。

「キミには、二つ目の本質と、四つ目の名前を与えなければならぬね」

ナイトダイバーが歯を噛み締める。蛇が体内を這いまわるような感触。形容しがたいこの感覚は、しかし彼にとつては初めての経験ではない。

二年前。肉体という器から魂を解放させるための、『魂の変質』の際、似たような感覚は味わっている。実際の肉体を蝕むのではなく、他者の魂を自らの支配下に置くスメラギの異能。その副作用。

その異能を行使できるからか、スメラギは上機嫌に語り始める。



「キミのアイデンティティを否定するようで悪いが、やはりヒトであった頃の名前は捨てるべきだろう。キミが元人間であることは誰も知らないし、誰も気付かない。ヒトにとつてキミは、非日常の存在なのだから」

魂を掌握された今、ナイトダイバーの体は彼の体であつて、彼の体ではない。自由に動かすこともできず、ただスメラギの好きなように造りかえられることを受け入れるしかない。

「ナイト・ハンターであることを避けるために造りかえるのだから、この名前も駄目だ。ヒトが付けた名前、ナイトダイバーは……まあ悪くはないが、少しばかり悪い冗談だね。ヒトがナイトハンターと呼ぶモノたちが、本来ナイト・ダイバーと呼ばれるモノなのだから、やはり別の名前がふさわしい」

——本当に？

スメラギの独白を聞き流しながら、ナイトダイバーは蛇の侵食に抵抗する。アイデンティティ。ヒトであつた頃から変わっていないものならば、ある。自分を納得させるには曖昧すぎて、言葉にするには少しばかり抵抗を覚えるものが。

だけど、それでも、今は四の五の言っている場合ではない。ナイトダイバーは自らの最後の砦に全てを賭ける。曖昧なものを明確にする。言葉にすることに躊躇しない。

「何を、言ってる？」

ウロコに包まれた腕を左手で掴む。金の瞳が見開かれた。ナイトダイバーは気にも留めない。気に留める余裕もない。魂の性質を造りかえているその中途にある体では、声を発することにも体力を使う。

理不尽に奪われようとしている『自分』を取り戻すためならば、残った体力を考える余裕は、ない。

ナイトダイバーは言葉を尽くす。並べる。重ねる。連ねる。

「名前なんてものは、曖昧だ。僕は僕以外のなものでもない。どれだけ多くの人に知られている名前だろうが、どれだけ本質に近い名前だろうが、そんなものはどうしても曖昧になる。だって、僕以外のモノが勝手に決めた名前なんだから」

駄々をこねているようだ、とナイトダイバー自身も思っている。我が儘で、独りよがり、自己中心的だ。

そうでなければ自分は守れない。自我。自己同一性。アイデンティティ。そんなものは全て、我が儘で、独りよがり、自己中心的だ。けれど、それを否

定したら全ては平均化される。他人の望むように均される。

「名前がいくつあろうが、僕自身は揺るがない。変わらない。たとえば体をなくし、影に潜れるようになると、姿かたちが変わろうと、僕の底は変わっていない！」

叫び、ナイトダイバーは右手を握り締める。包帯を刃のように変質させるのと同じ要領で、拳を硬質化。動かないスメラギの顔に容赦なく叩き込む。

鈍い音。スメラギの頭部が人間のそれと同じ構造をしているのなら、確実に頬骨は折れているだろう。吹き飛ばされた体がデスクに激突して停止する。

「僕の底を知らないくせに、本質だのなんだのを語るなよ、スメラギ」

言葉に反応してあげられたスメラギの顔に、余裕の笑みはない。

「……なぜ、動ける？」

驚愕に染められた瞳に目を向けながら、ナイトダイバーはスメラギへ歩を進める。片手で口元の包帯を下にずらし、顔を露わに。

「お前が言ったんだらう。僕はナイト・ダイバーを狩るもの、ナイト・ハンターだと。それは、間違っていない。その通りだ。僕はナイト・ダイバーを狩り、そして——狩りのあと、普通の生物は何をする？」

ナイトダイバーの返事は、問いの答えにはなっていない。それでも意味を理解したのか、スメラギは表情を凍らせ、逃走——

「確かに僕は失敗作だったみたいだ」

できなかった。ナイトダイバーから伸びた包帯がスメラギの体を縛り、安物のカーペットに叩きつける。

黒をまとい、白い顔を露わにしたナイトダイバーは、口元に笑みを浮かべながらスメラギに歩み寄り、

「お前が造ったのは、自分自身の天敵なんだから」

夜のオフィスに赤が飛び散った。

満月を見上げてみると、目の前を黒い影が横切っていった。

メインローターの起こす風が、ものすごい勢いで僕の髪や服を暴れさせる。ボディに描かれているのは、マイナーテレビ局のロゴ。スライド式の扉を開いて、シートベルトで体を固定したカメラマンが漆黒をこちらに向けている。それは、言うまでもなく、確認するまでもなくカメラで、やっぱりレンズと目が合ったように錯覚する。

近くに大型モニターはないけれど、リポーターの言葉はだいたい予測できる——「都市伝説・ナイトダイバーが我々の前に姿を現しました」だろう。定型文。決まり文句。視聴者がそれに飽きていることに、彼らが気付くときは来るのだろうか？

まあ、そんなことはどうでもいい。元々、僕は彼らが変われないことについて、どうこう言える立場にいない。なにせ、ヒトからヒトならざるモノに形を変えたというのに、中身だけは変わっていないんだから。

それは、他人から見れば停滞に見えるかもしれないけれど。でも僕はしっかりと進めている。と思う。

ナイトダイバー。ナイト・ハンター。呼び名はなんだっていい。いくつあったっていい。でも、その名で呼ばれて、僕が振り返るかどうかは、また別の話、僕の勝手だ。だから、ヘリコプターで僕を追いかける連中が僕を呼ぼうと、夜の闇に紛れて人を狩るモノが僕を呼ぼうと、僕はおそらく、振り返らない。だってそれは、僕の名前じゃあないんだから。

僕の名前を知る人間は、この世にたった一人だけだ。でも、その名を呼ばれば僕が振り返るんだから、それは本当の名前になるんじゃないだろうか。それこそが、僕の本当の名前になるんじゃないだろうか。

日本中の人間が知っている名前だろうが、ヒトならざるモノが使う名前だろうが、関係はない。僕がその声に振り返らなければいいだけの話だ。

本当の名前を知るのが、一人の少女だけだったとしても、問題はない。僕がその声に振り返ればいいだけの話だ。

不安定な足場で立ち上がる。一昨日、いや、もっと前だったか？

……ともかく、第二ラウンドだ。へりを背に、夜の街、その上空を走る。海

沿いのビルから、海岸線を添うように通る道路の街灯に着地。そばを通過していた人々が驚愕の声をあげる。ナイトダイバー。その名を呼んだ者もいた。けれども僕は振り返らない。夜の海は真っ黒で、潜りこむにはぴったりの『影』になっている。街灯のてっぺんを軽く蹴り、海に飛び込み、そして次に臉を上げるときには、

「おかえりなさい、■ ■くん」

オレンジ色の髪留めが目に入る。

ビタミンカラーの部屋で、澄んだ声が僕の名前を呼んだ。

〈了〉